

るジェンダーの非対称性があるということをお伝えし、シンポジウムへの問題提起とさせていただきます。ちょうど時間がきましたので、私の基調講演はここまでとさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

第二部 ケアラーとしての男性のいま

「ケア」が育む持続可能社会」

土堤内 昭雄

土堤内：みなさん、こんにちは。ニッセイ基礎研究所の土堤内と申します。私は、もともと建築や都市計画を専門にしています。特に社会学をやっているわけではなく、極めて門外漢でありますので、今日は自分の体験をもとにお話をしたいと思います。今日取り上げたいテーマは、『ケアが育む持続可能社会』です。ここでいうケアの概念は、介護だけではなく、いわゆるお世話をするという広い意味で捉えているので、子育てや病気の人の看護、自分が病気になった場合の治療をすることも当てはまります。今日のお話は、そのなかでも典型的なケアである、子育てと介護についてです。この2つはどこが違っていて、どこが共通しているのか、そのようなこともお話ししたいと思います。

最初は、子育てについてです。私は25年前に離婚して、以来、当時2歳と3歳だった、2人の男の子を育ててきました。当時は、小さな子どもには母親を、という3歳児神話のようなものがあり、男性である私が2人の子どもを育てていけるのか、という不安があったことは確かです。しかしながら、とにかく見様見真似で子育てを始めました。そのなかで、柏木恵子さんの「父親の発達心理学」という1冊の本にめぐりあいました。いわゆる育児書ではなく、子育てを通じて親がどのように成長発達するのか、ということの研究した本です。大きく2つのことが書いてありました。1つは、親は子ができただけで親になるのではない。親は子を育てながら親になる、ということです。確かに、子どもを産むのは女性ですが、女性も子どもを産んだだけで親になるのではなく、子どもを育てながら徐々に親になっていく。男性は、生物学的に出産はできませんが、子どもを育てながら親になることはできる。そういったことを本のなかで知りました。もう1つは、よく言われる、育児は「育自」、つまり子どもを育てる育児は親が自分を育てることもある、ということです。子育ては、ただ子どもが育っていくだけではなく、いろいろな課題や問題に遭遇し、子どもと親と一緒に乗り越えていき、その中で親も1人の人間として、大人として成長していく。

私は、子どもを育てるなかで、3つのことに気が付きました。1つ目は、子育てとは「子育ち」を支援すること、です。子どもが5歳になったときに、自転車に乗る練習をしました。それまでは3輪車に乗り、そのあとは後ろに補助輪の付いた自転車に乗っていました。長男が5歳の夏休みのときに、補助輪を取って普通の自転車に乗るための練習を始めました。私が自転車の荷台を押すと、子どもはすごく怖がっていました。「お父さん、絶対に手を離さないでね。」「大丈夫。絶対離さない。持っているからね。」と言っ

て、スピードが付いてくると手を離し、倒れそうになるとまた持つ。それを何度か繰り返しているうちに、子どもは自転車に乗れるようになりました。その体験から私が知ったことは、子どもはもともと自転車に乗る能力を持っている。それをある時期に誰かがサポートすることで、潜在化していた能力が顕在化する。私は、これこそが子育てだと思いました。

できないことをできるようにするのではなく、もともと持っている出来る能力を支えることによって顕在化させる、「子育て」を支援することが子育てである。このことに気づいて、子育てがすごく楽になりました。できないことをできるようにしようとすれば、とても大変です。しかしながら、もともとできる能力をよく見ることによって、それを顕在化させる。そういうお手伝いをするのだと考えれば、子育てはけっこう楽しいものだな、と思うようになったわけです。

2つ目は、子どもをゆっくりと育てるということです。会社から帰ってきたあとに、2人の子どもをお風呂に入れていたのですが、シャンプーをして身体を洗い、湯船の中で水鉄砲やアンパンマンの人形で遊んだりしていると、たっぷり1時間はかかるのです。なので、いつもお風呂から上がると、のぼせて倒れる寸前でした。そのとき、私は思いました。この子たちが、自分でお風呂に入れて、自分で着替えができて、自分でご飯を食べられるようになれば、私の人生は薔薇色だと。そのためには、この子たちを1日でも早く大きくしよう、と思って、どうにかして早く成長させる方法はないか、と真面目に考えていたのです。すると、子どもが1年生の時に学校からもらってきた「学校だより」に、校長先生が、次のように書いていたのです。「子どもはゆっくり育てましょう。子どもは子どもの時間をゆっくりと過ごすことによって成長するのです。」それを見て、私は、私の考えは間違っていた、とにかくゆっくり育てよう、と考え直しました。私の専門は建築なのですが、昔、建築学科で、このようなことを習いました。法隆寺の五重塔は、建立されてから1400年が経ち、使われている檜も、樹齢400年のものなのに、なぜ、その檜が、今でも健在であるのか。それは、その檜がゆっくりと育ったことで、細かい年輪を持っているからです。人間も一緒だと思います。ゆっくり育つことによって、丈夫で健全な人間が育つのでしょうか。

3つ目は、子育てとは「個育て」である、です。これは、休みの日に子どもと公園で遊んでいたときに、学んだことです。その公園の真ん中には大きな芝生の広場があって、周りにベンチがありました。私がベンチに座って、2人の子どもを放し飼いにすると、子どもはまるで牧草を食むように、あちこちを走り回ります。でも子どもたちは、遠くまで行っても、迷子になるようなところまでは行かないのです。ベンチに座っている私の顔をちらっと見てから、また違うところへ走っていくのです。そのとき思いました。子どもは親の存在を確認すると、安心して離れていくことができる。親と子が深い絆を作っていくのは、互いがもたれ合うためではなく、互いが1人の人間として自立し、自由に生きていくためなのだ。ですから、子育ては、個人の個と書いて「個育て」なのだ。いつもその

ように考えています。

一方で、育児とは、自分を育てる「育自」でもありました。子どもの健康を考えて、スイミングスクールに入れたのですが、そのとき、きっとこの子たちは泳げるようになったら、一緒にプールや海に行こうと言うだろうと思いました。じつは25年前の私は、泳げなかったのです。しかし、泳げないからプールに行くのは嫌だと言うのは格好悪いし、もし海で子どもが溺れても助けられなかったら、それよりもまず自分が溺れたらどうしよう、と考えました。それを解決するためには、自分も習うしかありません。結局、子どもと同じスクールの成人クラスに入り、5年かけて、泳げるようになりました。たぶん子育てをしていなかったら、今も泳げなかったと思います。子育てをすることによって、自分の潜在的な能力を子どもに引き出してもらいました。まさにそれは、自分を育てる「育自」でした。

育児が結果的に「育自」になるということは、子育てをするなかで、たくさん起こりました。例えば、このようなエピソードがあります。次男はカタツムリが好きで、洗面器に入れたカタツムリを2時間も3時間も眺めていることがありました。あるとき、彼が描いたカタツムリの絵を見ると、角が4本描いてあったのです。「角は2本じゃないの？」と言うと、「4本出ている。」というので、図鑑で調べてみると、カタツムリは大触角の下に小触角があり、2対の角があることがわかりました。これは、この時に初めて知ったことでした。私は、シンクタンクの研究員で、ものを観察し、分析し、文書にすることを仕事にしています。多角的に考えることが、私の職業上、とても大切なことです。自分がこうだと思っていることが、先入観や固定観念にすぎず、実際とは違っていることがたくさんあると、子育てのなかで気がつきました。それからは、常に子どもの目線に合わせ、いろんなものを見たり、考えたりするようになり、結果的に私の仕事に役立つようになりました。

子育てとは、予測のできないことがいろいろ起こる、一つのリスクマネジメントです。予測のつかないことが仕事よりもたくさん起こるので、逆に言えば、子育てのリスクマネジメントができれば、仕事は簡単です。仕事は、1つのことをきちっと仕上げてから次のことに進みますが、家事育児は、Windowsと同じように複数のアプリケーションを同時に立ち上げます。洗濯やアイロンかけや靴磨きを同時並行で行うなど、空いた時間に、いろんなものを詰め込んでいくのです。そのようなタイムマネジメントの仕方が分かってくると、仕事も効率的にできるようになりました。子育てをすることは、親も一人の人間として、あるいは職業人として、家庭人として、いろんな意味で成長していく機会であると、25年間で学びました。

すでに子どもは28歳と26歳の社会人になりましたが、現在は86歳の母親の介護に邁進しております。介護と子育ては何が同じで、何が違うのでしょうか。

1つは、介護は先が見えないということです。子育ては、子どもの何年後かの姿が見通せます。そのような違いが、あるように思います。ただ、母親の世話をするなかで、最初はその違いが大きな印象となっていました。今では共通点の方が多いのではないかと、思うようになりました。子育てでは、子どものできることが日々、増えていきますが、介

護では、母親のできることが日々、少なくなっています。しかしながら、残存能力といえますか、まだ持っている能力はたくさんあるわけです。ならば、介護とは、できることを見付け、それを活かすことではないのか。そう考えると、子どもの能力を引き出し、支えることが子育てであったのと同じく、介護もまた、できることを引き出すケアではないのか、と思うようになりました。私の母ができることも、ここ数年で急速に減っています。今は、洗濯することもそれを取り込むことも、私がすべてやっています。ただ、以前は私が畳むところまでやっていたのですが、今は母が畳む作業をやっています。動作も緩慢になってきている母が洗濯物を畳むと、すごく時間がかかるので、任せずにいたのです。しかし、母はまだ洗濯物を畳むことができると気づいてからは、取り込んだ洗濯物をソファに置き、母に、「洗濯物をたたんでね」、と言うようにしました。私がそう言うと、母はテレビを消して喜んでやってきます。うちの母は、若い頃、介護施設で洗濯物を畳むボランティアをやっていたから、洗濯物を畳むことにかけてはプロなのです。うちの母が畳むと、下着もシャツも、クリーニングから返ってきたもののように、ピシッと畳んであります。母は洗濯物を畳んで、それぞれの部屋に届けることをとても楽しみにしていて、本当に生き生きとした姿を見せてくれます。このように、一人一人が持っている力を最後まで活かしていくために、そうした力を見付けるのが介護をする人、ケアラーである、と私は思います。

先ほど控室でもお話していたのですが、これまで、企業の正社員として必要な条件は、かつての栄養ドリンク剤のコマーシャルのように、「24時間戦えますか」と、24時間何の時間制約もなく働ける人でした。しかし、今は、子育てや介護といった、さまざまな時間的制約のなかで、働く時代です。その中でも最近、話題になっているのは癌です。年間80万人が癌に罹っています。癌の5年生存確率は60%です。昔は癌になれば、治療に専念するしかありませんでしたが、今では、治療をしながら働くことができる時代になり、実際に32万人ほどが治療を受けながら働いています。自分や他者のケアを抱えながら働く時代がきたのです。今後はこのような現状を踏まえ、ケアを抱える人が、働きやすい組織、人事マネジメントをどのように確立していくかが、極めて大事なことになります。

日本は今、急速な人口減少社会を迎え、労働力人口も減っています。少子化対策を進め、出生率を上げ、出生数を増やし、将来の労働力人口を増やすことも重要な施策であるには違いありません。しかしながら、その達成には20年以上の時間がかかるわけです。だから、今減りつつある労働力人口を、維持していくためには、働ける人が十分に働ける環境を作っていくことが重要です。そのためには、「24時間戦えますか」ではなく、一定の時間制約のなかで、誰もが働ける環境をどうやって作っていくのか。そのための組織とマネジメントをどうするのか。これが私たちの人口減少社会において求められていることだと思います。

社会が持続するために重要なことは、子育てや介護が世代間に連鎖していくことです。私も、やがて誰かに介護される立場になっていくでしょう。2週間前、私の長男に子ども